2005- 2

札響くらぶ

第31号

発行／札響くらぶ
（財）札幌交響楽団内
札幌市中央区中島公園1番15号
（札幌コンサートホール内）
電　話 011-520-1771
ＦＡＸ 011-520-1772

頑張れ札響！

～札響のある街札幌～

札響くらぶ会長
上　田　文　雄

札響くらぶの活動をはじめて、かれこれ10年の月日が経過する。札響の定期演奏会場が厚生年金会館から札幌市民会館に変わり、ホールのサイズに合わせて定演入場者数が減少して行く傾向を寂しく感じながら、キタラの完成を１年余月後に控え、何としてもホールを満席の聴衆で埋め尽くしたい、そんな想いから札響の聴衆を増やす活動をはじめようとした。音楽は演奏家の演奏によって成立するかも知れないが、コンサートは聴衆の存在があって初めて成り立つ。私たち聴衆はコンサート音楽の無くてはならない重要な構成要素である。しかも、客席に隙間があると、コンサートの歓びは完全なものにはならない。やはり満席のコンサートホールで、演奏者と聴衆が対峙した静寂の瞬間、一種独特の緊張とこれが開放され、ともにわき上がる感動の共有こそが、コンサートの醍醐味というものだと私は思う。その醍醐味は、私がホールに足を運んでいるだけでは実現できない。札響コンサートを楽しみにする仲間を増やしていかなければ実現できない。演奏家も聴衆が熱ければ熱いほど、燃えるという。私たちもそのことを敏感に感じ取る。音楽への熱い想いとその表現に勢いと伸びを感じ取る。生きたコンサート音楽は、私たち聴衆と演奏家達の間にこそ生まれ出ることを、私は感ずる。だから、私にとって札響が演奏するホールは常に満席でなければならない。

そんな想いをともにする仲間達が、札響くらぶに集い、札響のファンを広げる活動をし続けてきた。99年からはじめた「札響くらぶコンサート」はその活動の一つである。くらぶ会員一人ひとりがチケットを売りさばく、そのセールストークが札響のすばらしさを友人知人に語り伝える道具になる、そう考えた。子どもたちを招待しよう。音楽の楽しみを知り、心豊かな人生を送るチャンスを提供したい、そして将来札響の良き聴衆になってもらうために。やがて、その札響くらぶの願いは、「キタラ・ファーストコンサート」という札幌市の施策となった。札幌市の小学６年生16,000人全員に、キタラで札響の演奏を聴いてもらう事業である。協力頂いた指揮者の尾高さん高関さん、そして札響のメンバーの、優しさにあふれる演奏は、子どもたちの心をしっかりとらえた。音楽ってスゲーなぁ。その驚きは、子どもたちの、音楽を楽しむ心に、美しいものを求める芸術心に、確実に灯をともし、心に刻んだ証だ。

札響も、私たち札響くらぶの想いに応えてくれている。苦しい時代を乗り越える努力を重ねている。ステージの上で楽員が演奏をする際の表情が、豊かになったと思えるときがある。聴衆を見る楽員の眼差しが、優しくなったように見えるときがある。あぁ、これが「私の札響だ」、と想える幸せな瞬間を、私はキタラで何度も体験するようになった。

多くの市民の皆さん方とともに、この幸せな時間をともにしたい、と私は思う。４月からは定演も２回公演となる。札響を聴く、札響に触れるチャンスが2倍になる。またまた、札響くらぶの活動は忙くならねばならない。

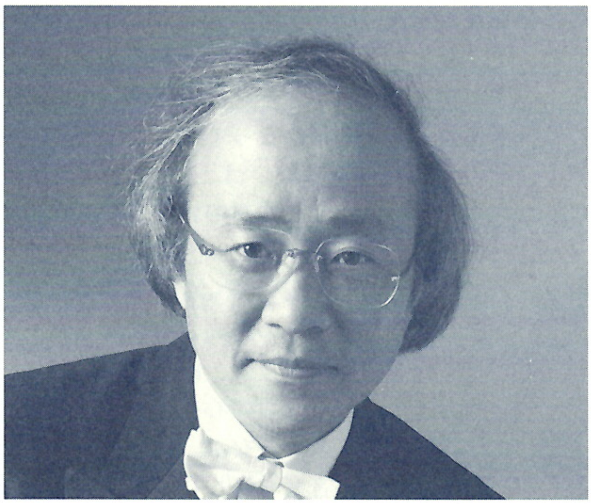
札響くらぶは札響を愛する人達の札響応援団です

指揮者に聞く

名曲をより一層
きちんと演奏を!!

尾高 忠明（おたか ただあき） さん

札幌交響楽団音楽監督



写真：佐藤雅英

尾高忠明さんのプロフィール

1947年、作曲家・指揮者尾高尚忠の次男として鎌倉に生まれる。桐朋学園大学で斎藤秀雄氏に師事。卒業後N響を指揮してデビュー。ウィーン国立アカデミー留学後東京フィル常任、札響正、読響常任、ＢＢＣウェールズ響首席、紀尾井シンフォニエッタMA・首席の各指揮者を歴任し、98年札響ＭＡ・常任指揮者に就任。04年５月からは札響で二人目となる音楽監督に就任。

国内の主要オーケストラは勿論、ロンドン・フィル、ＢＢＣ響、バーミンガム市響、ハレ管、ポーツマス響、ヘルシンキ・フィル、ロッテルダム・フィル、ストラスブール・フィル、バンベルク響、ワルシャワ・フィル、オスロ響、ベルゲン・フィル、メルボルン響、シドニー響、オレゴン響、香港フィル、ロンドン響等に客演。着実に日本人指揮者のリーダー的存在へ歩を進めている。

サントリー音楽賞を受賞の他、ウェールズ音楽演劇大学名誉会員、ウェールズ大学名誉博士号、大英勲章ＣＢＥ、エルガー・メダルを授与されている。

東京芸大非常勤客員教授も務めている。

１月９日「札響えべつニューイヤーコンサート」ゲネプロ終了後、2005年度の定期演奏会のプログラムなどについて音楽監督の尾高忠明さんに伺いました。

―― 2005年度のプログラミングのねらい、意図というところからお聞かせ下さい。

尾高 まず、定期公演が二日間になるということで、ある意味で冒険になりますので、プログラミングでの冒険は過ぎると、やはり集客にこたえるだろうと、それは事務局に言われたのではなく僕自身も危険だと思いました。そこで、いい曲で余り有名過ぎてなかなか定期で取り上げられない、そういうものをちゃんとやろうじゃないかと考えました。そうすれば集客にも良い影響があるだろうし、曲の良さをより分っていただけるだろうと思い、奇をてらったようなものではなく、本当に良い曲で行こうということです。なおかつ、その指揮者が得意にしているものだけにしようと思いました。

例えば、４月の定期で僕が「悲愴」を振りますが、札響は「悲愴」をよく演奏しているはずなのですが、調べてみるとそれほどやっていなくて、やったのは定期以外の公演で定期ではもうずいぶんやっていません。とにかく大変な名曲ですから、オープニングにこれほどふさわしいものはないと考えました。

また、オッコ・カムさんのシベリウスですが、シベリウスは頼まれるのがほとんど98％は「二番」で、「二番」はもちろん良い曲ですが、本当のシベリウスの良さは違う曲にあり「一番」でも「二番」でもない、そういう曲を日本人はもっと聴かなければいけないし良さが分らなければいけない、そこで、札響は日本のオーケストラの中ではシベリウスの音にすごくあっていると思うので「七番」と「四番」をメインにお願いしたら、最初はこういう注文にびっくりなさったようですが、とても喜んでおられました。

そして、「札響のサウンド」と言った時にいろんな名前が出て来る中で、武満徹さんという人は本当に札響を愛した人で、かつ、僕自身も出版社の人に「世界で一番多く武満を振っているのはお前だ」と言われました。全然考えてもみなかったのですが、言われてみると、最近は小澤先生も昔ほどはなさらないし、岩城先生もなさっても限られているし、僕は外国なんかに行った時は本当によく武満は入ってますし、日本でもやっているし、レコーディングもしているしということで、武満没後10年ですので、以前岩城先生がなさった「オール武満」以来で、定期が二日になるので冒

険ではありますが、絶対に、僕たちを愛してくれた武満さんに捧げようと思いました。そうしたら、既にこのプログラムを聞いた東京とか大阪の人達が「行くよ」と言って下さり、本当にありがたく思い、良い演奏にしなければいけないと思っています。

また、僕達には高関さんという素晴らしい正指揮者がいて、指揮者は皆譜面を勉強しますが、高関さんは譜面の虫というか、すごく細かいところまで考えてにこにこしているという人で、そういう彼の良さの出るプログラムということを考えました。例えばこの前の「メタフォルモーゼン」をやろうと僕が最初に言った時、一部の人から「冒険が過ぎる」と言われましたが、実際やってみて好評だった。だから彼の良さが出る曲と考え、マーラーの「大地の歌」なんかは、本当は僕がやりたい曲ですが、やっぱり高関さんの解釈でやっていただくのが良いと考えました。

このように、皆さんが最も得意とし、一番やりたいものをやっていただくというのが根本です。このプログラムを見て、ずいぶん冒険が少ないと言う方もいるかもしれないし、集客を考えたでしょうと言う方もいるかもしれないが、そういう批判は甘んじて受けて、まずお客様にいらしていただこうと考えました。そうしたら、意外にいろんな方が「面白いよ」と言って下さり、ちょっとほっとしているところです。

―― 尾高さんお薦めの注目点はどんなところでしょう。

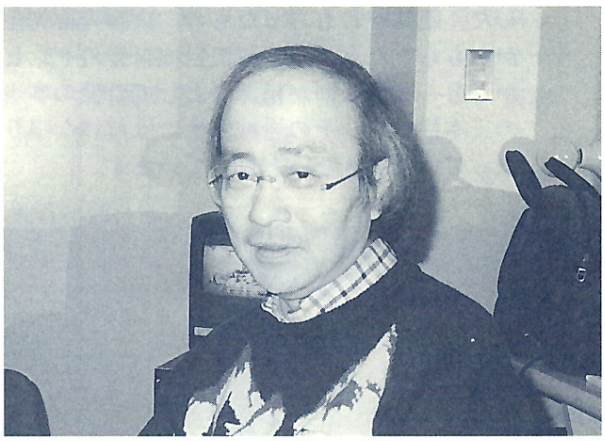
尾高 そうですね、カムさんのシベリウスというのは、自分も聴きたいという気持ちです。それから、もし僕が振らなくても良いならば、そういう訳にはいきませんが、このオーケストラの「オール武満」というのはぜひ聴いてみたいですね。

5月の「大地の歌」では、白井さん、福井さんという素晴らしいソリストが揃って、これもぜひ聴いてみたいものですね。

岩城先生のストラビンスキーは本当に素晴らしくて、僕はストラビンスキーに関しては岩城先生と小澤先生が世界の双璧ではないかと思いますが、岩城先生の「火の鳥」全曲が入っているというのも聴いてみたいですね。

僕の演奏について言えば、いい仲間と一緒に出来るということですね。指揮者とソリストの相性というのもありますし、本当に気の合った人と一緒にやるというのは、最初の原点から高いところで出来ます。ピアノのフェルツマンとは、向こうでもプロコフィエフを一緒にやりましたし、プロコフィエフにしようかなとも思いましたが、いろいろなことを考えて今回はラフマニノフになりました。本当にすごいピアニストで、ちょっと普通のピアニストとは違う。ロシア人で、この曲にうってつけじゃないかなと思います。

チェロのスティーヴン・イッサーリスは、エルガーのコンチェルトで何度も協演しています。東京公演で聴いていただいたロバート・コーエンなんかもすごく上手いのですが、良い意味で普通に上手い。スティーヴンはちょっと神がかっていて、本番中に目がうつろ



になっちゃうような「お前大丈夫か」というような感じで、なんかこう乗り移るんです。この間もシンガポールでエルガーをやりましたが、オーケストラも「わあ、神様」なんて言ってました。彼のエルガーを聴いていただけるのはすごくうれしいです。

フルートのエミリー・バイノンは今オランダのコンセルトヘボーの首席ですが、その前は僕がやっていた英国のオケにいました。そのオケで、上手い人が入って良かったな、と思っていたら数カ月したら「私辞めます」というので「どうしたの」と聞いたら「コンセルトヘボーに受かっちゃたんです」ということでした。それ以来会ったことがなかったんですが、何年か前に新日フィルで「オール武満」をやった時に呼んだら、信じられないくらい上手かったので、今回、武満をやるとしたらまず絶対彼女を押さえたいと思っていました。

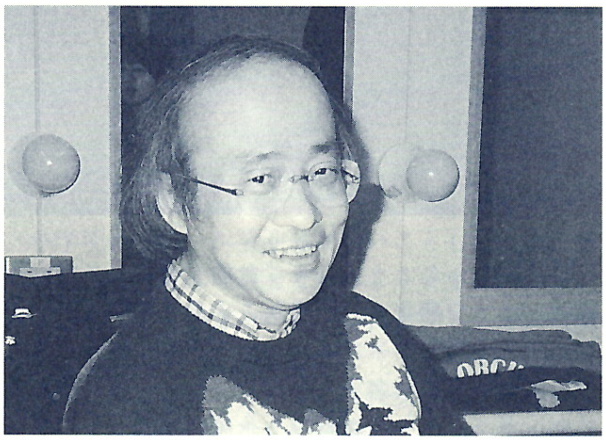
廣狩君については、言うことはないですよね。廣狩君のような人が僕達のオケの首席奏者をやっていてくれるということは、北海道や札幌の大変な宝です。一緒にやっていて、彼から出てくる音楽が何とも自然に音楽的でいつもこっちの心が洗われるようなところがあります。以前、林光さんの曲をやりましたが、武満は大分違うので、今から曲について

の話し合いをしています。

四人とも僕としては、最高のソリストに来ていただいてうれしいなと思っています。

―― 客演の指揮者をご紹介いただけますか。

尾高 岩城先生はここの前々任者であり、札響が一番発展した時の音楽監督でいらっしゃいました。僕自身が指揮者になろうと思って斎藤先生のもとで学び、ある程度してからN響の研究員になって5年程あそこの指揮をしていらっしゃったのが岩城先生で、本当にいろんなことを学びました。演奏旅行は全部ついて行きましたし、鞄持ちのようなこともやりました。親父からもらったもの、斎藤秀雄先生からもらったもの、そして岩城N響のコンビからもらったものが指揮者としての僕の本当の三本柱です。その岩城先生には可能な限り振っていただきたいと思っています。



オッコ・カムさんは、カラヤンコンクールからでしたね、素晴らしいデビューをしてどんどんのしていったのですが、ある時ちょっとやる気がなくなったのかどうか知らないけれど、僕そんなに出世しなくてもいいよ、といった感じでヨットで遊びに行っちゃったりというような時期がありました。東フィルで呼んでと言ったら、やりたくないというようなことで、心配していました。すごい才能のフィンランド人で、以後のサロネンやバンスカなどより原点の音楽の良さというものを体の中に持っていると思います。最近またすごくやっているよ、といううわさを聞いたので声をかけて、断られるかなと思って、その上でこのプログラムを提案したらすごく乗り気になって下さっています。これはまさに正調シベリウスをうちも勉強出来るし、お客様にも喜んでいただけるのではないかな、と思っています。

オトマール・マーガさんは、実は僕がN響の研究員時代に有馬大五郎さんというN響の事務局長をされてうちの親父とコンビを組んでいた人で、当時は理事でしたが、その人のおつきでヨーロッパの余り名も知られていないようないろいろなオーケストラを聴いて回りました。何なのかと思っていたら、指揮者探しだったのです。ある時ボッフムというドイツの町で、オケは余り良くなかったのですが、ちゃんと振っている人だな、と思って演奏会を聴いていたのがマーガさんでした。有馬先生がどうだと言うので、いいですねと答えたら、行こうと言って楽屋に行って、N響を振らないかと有馬先生が言うと、さすがにN響の名は知っていて、喜んで振らせていただきます、ということでN響にいらっしゃいました。その後、東フィルにも何度も来ていただき、事務所が「音丸麻賀」という判子を作ってあげましたら、それをすごく喜ばれていました。彼がデンマークのオケにいた時に僕も客演しましたが、オケが持っている指揮者の部屋があり、普段はマーガさんが使っているその部屋を1週間程使わせてもらいました。ドイツ系の良い指揮者というのはなかなな少ないのですが、ドイツ・オーストリアの音楽をやる時にドイツ人の指揮者というのを経験したい訳で、今回はブルックナーですが札響がどういう音を出すか楽しみです。

広上さんは僕と中学校が一緒なんです。僕の兄に作曲かピアノを習っていましたから昔から知っていました。「お前、背がちっちゃいな」なんて言ってましたが、最初に彼の指揮を見た時、背の小ささを感じさせない音楽の大きさとか情熱とか表現意欲とか、今までの日本人指揮者にはない激しさでびっくりしました。その後、オケとしっくりいかないというような時期もありましたが、僕はずっとあの人は絶対出てくるよ、と言っていましたがやっぱり出たという感じでした。一時、外国でがんばろうという、大野和士君と仲が良くてでもライバル意識も強くて、大野君があれだけやっているのだから僕も外国で、という意識が強くて、日本の仕事をずいぶんやめようとしていました。それもいいけど、日本でもちゃんとやってほしいな、と思っていたらだんだん考えが変わって、日本でちゃんと振るというだけでなく、東京音大ですごく一生懸命に教えています。並の情熱ではなく、東京音大はきっと良くなると思います。今月ボッセさんがなさいますが、来年彼のモーツァルトを聴けるというのは、モーツァルトイヤーでもあり、感慨深いものがあります。

―― ありがとうございました。

（佐藤良次）

札響物語　30

印象に残る協演者①

400回を超える札響の定期演奏会の中には、印象に残る協演者がたくさんある。順不動で印象をつづってみる。

1982年の第230回定期で協演した指揮者のフルヴィオ・ヴェルニツィとヴァイオリニストのウート・ウーギの関係は、封建時代を目の当たりにした感がして忘れがたい思い出である。

ウーギは、札響定期演奏会のソリストとして招聘された。当日のプログラムは、ハイドンの交響曲第87番、ウーギが弾くベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲、それとベートーヴェンの交響曲第６番「田園」だった。

ハイドンも「田園」も出来は悪くなかったがやはりウーギが弾くベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲は圧巻だった。以前、ヨゼフ・スークが同じベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲を札響と演奏したことがあり、小指が我々の親指ほどある太い左手で、それでなくても間隔の狭い高音の半音をどうやって弾くのか興味津々だったが、前の音を押さえた指を下にずらして次の音を弾く、実に丁寧な正確な演奏だった。この奏法も、スークの堂々としたベートーヴェンが生まれてくる１つの要因なのかと思った。

名器を使うウーギは、とろけるような甘い美しい音なのに音楽は甘くなく、ゆるぎなく構築された緊張感のあるベートーヴェンだった。

ウーギはミラノの名門貴族の出身だった。終演後に食事を共にした時、「半年は自分のヨットで釣り三昧」と言っていた。「ヴァイオリンはいつ勉強するの」に、「気が向いた時、演奏会の前とか」と答えが返ってきた。

一方、ヴェルニッツィは平民の出らしく、演奏会の時は全く気配を感じなかったが、食事になると、まるでウーギのしもべのように敬語を使っていた。

オーケストラの演奏会では、ソリストはもちろん大事だが、指揮者はもっと大切な存在なので、同席していて、とても居心地の悪い思いをしたものである。

ウーギは決して尊大な人間ではなく、むしろ気さくな人だったので、イタリアではそんなに階級意識があるのだろうか。ヴェルニッツィがとても気を遣っていたように見えた。

音楽家の中では、演奏家の技量が問題になるだけで、身分の上下など関係ないので、この夜の経験は、忘れられた古い時代を見せられたような気がしたものだった。

（竹津宜男）

from 「札響くらぶ」

第７回札響くらぶコンサートのお知らせ

毎回好評のコンサートは、札幌交響楽団との共催で「札響くらぶコンサート2005」として下記の通り開催されます。詳細については、別途郵送されていますチラシ等でご確認下さい。

日　　時　平成17年５月７日（土）　16：30開場　17：00開演
場　　所　札幌コンサートホール・キタラ　大ホール
指揮とお話　尾高忠明（札響音楽監督）
料 金 等　一般 3000円　高校生以下 500円
会員先行発売は２月23日(水)に開始一般販売開始の３月18日の１週間前に〆切予定

プログラム等につきましては、別送の「お知らせ」をご覧下さい。

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団　フルート奏者

清水（しみず） 国雄（くにお） さん

ご出身は上砂川炭鉱だそうですが　ホルンの菅野さんと同じですか

そうなんです。彼の家は、私の長屋の真向かいでした。でも、菅野さんがエキストラで来ていた頃は知りませんでした。菅野さんのお母さんが、プログラムを見て「あら、国雄ちゃん知ってるわ」という訳で楽屋に来てくれました。「あら、おばさん！」とその時初めて知りました。おばさんには悪ガキの頃を知られているので、頭が上がりません。

音楽との出会いは

小学校の頃は、お袋が体が弱いこともあって、将来は医者に、なんて思っていたようですが、３年から６年まで習った先生が専門は化学でしたが、音楽がお好きで、よく合唱なんかをやりました。先生は弾けなかったピアノを練習して伴奏を弾けるようになり、４年間、放課後に皆で歌わせたりしてくださり、音楽が好きになりました。

楽器を始められたのは

中学に入って、最初は化学クラブに入ったのですが、１年の終わり頃に「何か楽器をやりたいなあ」と思い、吹奏楽部に入りました。田舎の学校ですから楽器も少なく、何をということもなかったのですが、音楽の時間に横笛をやっていたので、顧問の先生に「ピッコロをやりなさい」と言われて始めることになりました。フルートにふれたのは、３年になって、先生の個人の楽器を貸していただいたのが最初でした。その後、高校でも吹奏楽部でフルートを続けました。

札響入団までのいきさつは

高校の２年の冬に父が亡くなりましたが、それまで何度お願いしても買ってくれなかった楽器を、その一年くらい前に買ってくれました。でも、父は音楽を習うことを認めてくれず、父が亡くなって、ようやく母が許してくれ、当時のＮＨＫ札幌放送管弦楽団のフルート奏者小松昭五先生に習いに行くことになりました。週１回札幌に通ってレッスンを受けました。高校卒業後札幌に出て、更に習いながら、ＮＨＫ札幌放送管弦楽団に先生の紹介でエキストラで使っていただいたりしているうちに、札響に空きが出来て研究員にしてもらい、２年後に改めてオーディションがあり、正団員になりました。

そんな清水さんの今後の札響への期待は

昨年、一昨年と札響の危機が言われ、楽員も意識改革を迫られました。はっきり言って、安泰にあぐらをかいて、楽員がわがままを言っていた面もあると思います。でも、今は楽員の意識も変わり、すごく良い状態になっていると思います。今後、札響ががんばって、また良い状態になったとして、その時に、音楽家っていうのは一般的に言ってわがままですからね、また、かつてのようなわがままを言わないように自戒することが大切でしょうね。

多趣味と伺っていますが

登山、山スキー、写真、オーディオと僕の趣味っていうのは一人でやるもので、集団でやるのはあまり好きではないですね。登山は本格的には社会人になってからですが、今は、そのために時間を取ることは出来ませんから、地方公演に行った時にその地の山に登る、というような方法で楽しんでいます。

最後にファンに一言

札響くらぶの皆さんはもちろん、ピリッキーの皆さんもその他のファンの皆さんも、本当に僕達の心の支えになり、感謝しています。私の愛用のフルートのメーカー（マテキフルート）の方が、札響の危機という時に「自分にも何かお役に立てるなら」と札響くらぶに入会して下さいました。それを聞いた時、本当に嬉しくありがたいと思いました。

札幌交響楽団　ヴィオラ奏者

鹿島（かしま） 祥湖（よしこ） さん

ご出身は

山形県酒田市で生まれました。当時としては珍しく両親が共働きで、母は教師で父は石油関係の会社に勤めていて、頻繁に転勤がありましたので、母の実家のある酒田で中学２年ぐらいまで育ちました。

音楽を始めたきっかけは

教会で経営していた保育園に特別に３歳から入れてもらったのですが、周りのお兄さんやお姉さんが保育園が終わると皆ヴァイオリンを習いに行っちゃうんです。それで、もっと皆と一緒にいたいな、と思ったのでしょうね、自分から進んでヴァイオリンを習いたいと言ったようなんです。酒田や鶴岡などで３か所ほど教室を開いていた先生に習うことになりました。

今考えてみますと、そんな小さい時ですから音楽することや魅力を感じるというよりも、皆と一緒にいたかったのでしょうね。週３日レッスンに通い、夏には合宿にも参加し合奏の楽しさを知りました。

音楽を専門にと思ったのは

楽器は趣味としては一生続けたいと思っていました。専門にやろうとか、プロの世界で職業として出来るとは考えていませんでした。それが、様々な出会いや出来事が重なって、今に導かれたと感じています。

中学３年以降も柏崎・東京と父の転勤が続きましたが、ヴァイオリンは習い続けていましたね。

将来の進路を考える時期になり、福祉の分野で仕事をしようと考え、先端教育の場であった明治学院大学社会福祉学科に進学しました。ところが入学直後、大学オーケストラの先輩から「一人で弾いているより何倍も楽しいよ」と誘われ、楽器を持って登校する毎日でした。２年生から卒業までコンサートマスターをやらせていただきました。でも、その時点でも音楽家云々は考えておらず、特殊教育教員免許を取得し、その分野への就職を考えていました。

当時の仲間たちとは現在も交流を続け、ふれあいを大切にしています。

なのに札響に入団したのは

大学時代に芸大のトランペット科を出た主人と知り合い結婚し、彼の札響入団と同時に札幌に来ました。私は専業主婦のつもりでおりましたが、当時の指揮者Ｐ・シュバルツさんにエキストラとして呼んでいただき、「ビオラをやれないか」との話からレッスンを受け、オーディションの後、入団することになりました。結果として、考えている方向とは別の道に「お出で、お出で」と導かれてきたようでね。

ヴィオラには抵抗はありませんでしたか

むしろヴァイオリンが好きだったのでなかなか切り替えがつかず、抵抗感はありました。ところが、定期演奏会のソリスト今井信子さんとバルトークのコンチェルトを協演した時、ヴィオラという楽器の持つ魅力を強く感じました。人の声に近い音色ですし、すっかり好きになりました。あの時の経験はまさに「目から鱗が落ちる」というのでしょうか、私にとっての原点だと思っています。

私の周りには楽器の違いはあっても協演者をはじめ、素晴らしい指揮者、演奏家が大勢いらっしゃるので、すべての方たちが私にとっての先生と思っています。個人的には、なかなか時間は取れませんがボストン交響楽団のＭ・ザレッキーさんの教えを受けるため、３年間出かけたりしました。

趣味についてお聞かせ下さい

ゴルフ、魚釣り、お酒とか言われておりますが、どれも皆でワイワイ楽しくといった感じです。

小さい頃の「皆と一緒に」の気持ちは今も、ずっとのこっているのでしょうか。

「来ない！」と誘われて何となくついて行く、それがいつの間にか楽しみになっていた、というところです。この２・３年は自宅の小さな畑で野菜造りなどにも夢中です。土をいじっていると気持ちが何となくホッとするんですよね。でも、メインは楽器を弾くことですから、楽しみは全部そのための心とからだのケアだと思っています。

ありがとうございました。　　（佐藤良次）

from 「札響くらぶ」

第２回交流会開催

本年度２回目の交流会が、04年11月28日（日）の名曲シリーズ終了後、午後５時30分からレストランキタラで開催されました。

上田会長、西村札響専務理事の挨拶の後、当日のコンサートの指揮者佐藤俊太郎さんの音頭で乾杯。いつものように、会員と楽員さんとの和やかな歓談が行われました。会員からも楽員さんからも「交流会の回数をもっと増やしてほしい。少なくとも年に４回くらいはやってほしい」との声があり、スタッフ会議に報告され、来年度の事業計画に取り入れることになりました。

ニューイヤーコンサート&パーティー開催

昨年初めて開催されて好評だった「札幌交響楽団ニューイヤーコンサート＆パーティー」が、１月７日(金)午後７時からロイトン札幌で開催されました。

前半のコンサートでは、尾高、高関の両指揮者によりモーツァルトの歌劇「フィガロの結婚」序曲、メンデルスゾーン交響曲第４番「イタリア」第１楽章などが演奏されました。最後には、ウィーンフィルのニューイヤーで「スマトラ沖地震の被害者に配慮し、今年はやりません」とロリン・マゼールが述べて世界中で話題になったラデツキー行進曲について尾高さんが「それはそれで崇高な考えだと思うが、様々な考えがあってよいと思う。私はやります」と述べ、弦楽器は尾高さん、管打楽器は高関さんが指揮をするという趣向で、例によって手拍子でコンサートを締めくくりました。

後半のパーティーは、札響の菊池理事長や上田札響くらぶ会長などの挨拶の後、鏡割りが行われ、新春の華やかな雰囲気で歓談が行われました。

ＳＰＣとの交流会実施

仙台フィルハーモニークラブ（ＳＰＣ）の工藤会長ほか10人の皆さんが、２月26日の定演を聴きに来札します。歓迎の交流会を２月25日（金）午後７時から、ホテルルーシス札幌で実施します。会員の皆さんにはハガキで既に連絡済みです。これまでに、札響くらぶとＳＰＣは札幌と仙台で交流会を行ってきましたが、２回目の札幌での交流会、きっと賑やかなものとなるでしょう。

東京公演ツアー実施

３月６日に、すみだトリフォニーホールで行われる「地方都市オーケストラ・フェスティバル2005」に出演する、札響の今年度２回目の東京公演へのツアーの参加者を募っておりましたが、１月末現在で10名の参加希望があり、ツアーが実施されることになりました。

公演では、尾高さんの指揮により、札響が高い評価を得ているオール・シベリウス・プログラムが演奏されます。きっと、東京の音楽ファンを唸らせることでしょう。

ツアーは、３月５日出発の１泊２日の日程です。５日の夕刻には、参加者と東京在住の会員との交流会も予定されています。６日午後３時からのコンサートを鑑賞した後、帰札することになります。

編集後記

尾高さんに、来年度の定演のプログラムについて詳しく解説していただきました。ぜひ参考になさって下さい。来年度は、私たちの耳に馴染んでいる名曲が多数予定されており、今から楽しみです。定演の２公演も始まります。札響にとって成功であった、という成果が残ることを切に願っています。そのためには、何と言っても定期会員の確保が最重要です。まだ定期会員になっていない方は、ぜひ会員になって札響を支えていただきたいものです。（佐藤良次）

「札響くらぶ」を無駄にせず、読み終ったらお知り合いへ。

次号の「札響くらぶ」は05年６月発行の予定です。